

第2章 ワールデンみんなで育てる

STEP5 内容設計「具体的なプロセスはどう作り、どうつなげるのか」

<ワールデン10のいいね!>

- 1 協働でうまれる力
- 2 特技とリソースを持ち寄る
- 3 みんなが主役！主体的に参加する
- 4 とにかく楽しい！ひたすら楽しい！
- 5 「ゆるさ」って大事
- 6 農作業は地域づくりに向いている？！
- 7 非日常じゃなく「日常」
- 8 成果は「じゅわじゅわ」あらわれる
- 9 多様性は豊かさ 多様性は強さ
- 10 信じれば叶う！あきらめたらおしまい

STEP 5

内容設計

「具体的なプロセスはどう作り、どうつなげるのか」

- ✓ 目標は何年で達成する？ 中期と短期のビジョンは？
- ✓ 全体のプロセスデザインと1つひとつのプログラムデザインは？
- ✓ プロセスは誰がファシリテートする？

枠組みとステップはあるけれど、中身はみんなで1から考える！



うきうき期、わくわく期、るんるん期というプロセスデザイン

愛知県国際交流協会では、当初から決めていたことがありました。
それは、最終的には住民主体の活動として、
ワールデンプロジェクトが地域に根ざし続いていくこと。
そのために、少なくとも5年はこのプロジェクトをサポートしようということ。
ワールデンプロジェクトでは5年のプロセスを3期に分けて、
各期ごとの目標を決めました。

- * 1・2年目「うきうき期」…とにかくたくさんの人を集めよう！
- * 3・4年目「わくわく期」…地域住民が主体となる仕組みを作っていこう！
- * 5年目 「るんるん期」…ワールデンを新たな活動が始まる拠点にしよう！

いつも大切にしてきたことは、みんなで考え、みんなで作り、みんなで楽しむこと。
1からの参加型で対話を大切にし、誰もが発言しやすい場をすること。
想いと場と空間を共有すると、関係性が深まります。
課題と関心を共有すると協力が生まれます。





ワークショップ形式の実行委員会と畑での合同作業を月1回定例化

定期的にみんなで集まり話し合うことが大事！ ということで、月1回平日夜2時間半の実行委員会を定例化しました。プログラムの準備とファシリテート、会議の記録作りは、NIED・国際理解教育センターに担ってもらいました。

「どんなガーデンにしたいか」 から始まり、
「そもそも多文化共生とは何か、何のための多文化共生か」
「ワールデンでしたいこと・できることは何か」
「3年後に地域がどうなっているといいか」
「そのために今年は何に取り組めるといいか」
「外国籍の人々がワールデンに関わるようになるためにはどうしたらいいか」
など、実行委員会には毎回テーマとねらいがあります。

話し合う時は、小グループになって、模造紙に意見をまとめ、発表します。批判ではなく質問、否定ではなく提案が合い言葉。

意見が分かれることは、視点を変えたり、メリットデメリットを比較して検討します。

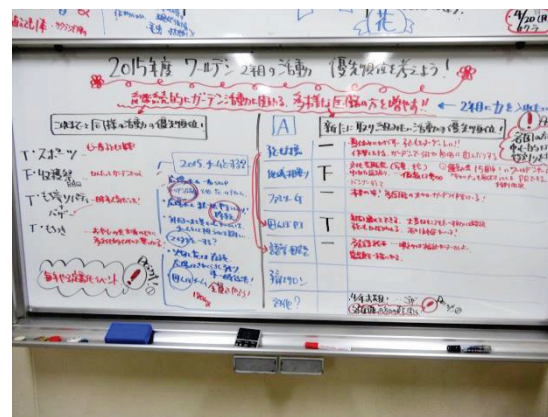
忙しく活動するようになると、つい目先のことやイベントの準備にあくせくしがちです。でもそのつど「ワールデンのミッションは何か」に立ち返り、ワールデンは単なる畑づくりを楽しむ会ではなく、ワールデン活動を通した多文化共生のまちづくりなのだ、とみんなで確認しあいました。

ほどなくして、月1回(夏場は月2回)の畑での合同作業も定例化されました。ワールデンの作物や植物の賑わい、広場の格別の居心地の良さは、合同作業日以外でもワールデンを訪れ、自主的に水やりや草とり、大工仕事やメンテナンスなどに惜しみなく力を注ぐメンバーのお陰です。



プロジェクトの具体的なプロセスをつくる上で、ポイントになったことを『10のいいね!』でご紹介しましょう!

⇒ P.17~36





1 協働でうまれる力

市民×行政×NPO
強みも立場も異なるわたしたちが
ひとつの想いを共有し、
それぞれの強みを活かしあう。

正直、きれいなこと
ばかりではありません。
理解が難しいことや
歯がゆい思いをすることも、
もちろんあります。

それでも、対等に・正直に
関わる中で、相互理解もすすみ、
1+1+1が5にも10にもなるような、
そんなわくわくが生まれています。

ひとりではできないけれど、
みんなと一緒にならできる気がする。
協働から生まれる力が
プロジェクトを支えています。





対等につながる 市民、行政、NPO

わたしたちの「まち」にはいろいろな人が暮らしています。誰もが気持ちよく、誇りと愛着を持って暮らすことのできるまちにするためには、みんなの智恵とチカラが必要です。

わたしたちのワールデンは、一ツ木町住民、刈谷市、NIED・国際理解教育センター、愛知県国際交流協会の4者が対等な立場で協働しています。

それぞれの「できること」と「できないこと」を正直に伝え合うことで、押しつけや強制ではなく、互いの立場や想いを尊重し合いながらプロジェクトを進めてきました。



地域の中で協力者を探す

行政とNPOとの協働の話がまとまり出したところで、わたしたちはまず、「一ツ木自治会」に協力を求めることから始めました。一ツ木自治会は、地域の人々をつなぎ活発な地域活動を牽引する中心的存在でした。また、当時は刈谷市国際化・多文化共生推進事業のモデル地域として、多文化共生のまちづくり活動が始まったばかりの時でした。

地域に「行政が持ってくる話」の数は多く、自治会としても精査が必要となります。この目新しい「コミュニティガーデンを一緒に作りましょう」という自治会への話に、地域のみなさんの手放しの賛同が、最初からあったわけではありません。

何度も説明会を開き、コミュニティガーデンについての勉強会を開催してプロジェクトと協働の意義をお伝えしました。

また、コミュニティガーデンを開設する土地も、地域のみなさんの協力がなければ見つかりませんでした。土地探しは難航しましたが、土地が見つからない中でも勉強会を繰り返し、コミュニティガーデンの意義と可能性を知り、人と人を、人が人を、つなぐまちづくりであると賛同していただき、地域住民を中心とした協働のかたちができていきました。



協働は目的ではなく手段

- ① 地域における経験値、信頼に根ざしたネットワークがあり、ネットワークの良さという強みを持つ市民。
- ② 公的な根拠と使命感を持ち、多文化共生のための事業を立案、予算の確保や事務力に長けた行政や公的機関。
- ③ 住民主体・行政協働のまちづくりのプロセスを支援し、想いを形にする方法論を持ったNPO。

それぞれの強みを活かし、足りないところはカバーしあいながら、自治会・地域の人々、行政、公的機関、NPOとの協働だからこそ創ることのできる場・ワールデンが生まれ、4者の協働は徐々に徐々に歯車が合い、現在の活動につながってきました。

「協働」の形は一樣ではありません。また、全てのプロジェクトで協働が必要なわけでもありません。プロジェクトを行う上で、協働の必要性や適切な協働相手、そして協働の方法を考えることが大切です。



協働者としての外国人を見出す

- 多文化共生の地域づくりを進めるうえで、協働者の中に外国人住民も加わっていることが大切になります。
- どのような機会を作れば、外国人住民の参画が進むのか？プロジェクトのどの部分で彼らを活かすことができるのか？ワールデン実行委員会にも外国人住民が加わっていますが、より多くの外国人住民が主体的に参画できるような仕掛けや仕組みを考え、実行していくことが必要だと考えています。



2

特技とリソースを持ち寄る

ワールデン活動に「必要なもの」はすべて地域にありました。

市民、行政、NPOの協働がそれぞれの強みを活かすように、メンバーがそれぞれの特技やリソースを持ち寄ることで活動はどんどん豊かになりました。

活動に必要とされる力を持ったメンバーが加わるという流れも。

ワールデンは、地域住民の個別の強みを活かした地域の間へと成長してきました。





地域はリソースの宝庫

開園間もないころは、ワールデンを訪れる度にその変化に驚きました。前回まではなかった看板やアーチが完成していたり、畑が耕されていたり、色とりどりの花が植えられていたり……。

会議や作業の中で、みんなで話し合い考えた、ワールデンに「あるといいもの」や「できるといいこと」。どれもこれも、メンバーがそれぞれの特技やリソース、時間を活かして実現してきました。



<ワールデンメンバーの特技やリソース例>

- 野菜や米づくりのノウハウと農機具
- 野菜をおいしく調理する腕前
- 設備づくりに必要な木材や端材
- 花やハーブに関する知識
- ロゴや写真記事作成のデザイン力
- マイタケハウス、ベンチなどの工作
- 外国語による通訳
- イベントの司会進行



みんなの「できる!」と「したい!」が場をつくる

ワールデンは、更地からのスタートでどのような場をつくるかも、みんなで話し合うことから始まりました。ゼロからつくっていきけるということが、関わることの楽しさと主体的な関わりを生みました。

そして、畑や広場づくりに必要な、自由に使える資金が少なかったこともポイントになりました。

資金がないことで逆に、一人ひとりの、この場で「できる!」、この場をつくるために「したい!」という想いと知恵を引き出し、無理のない範囲でそれぞれが特技とリソースを持ち寄ることや、できる人に頼んでみるということにつながってきました。



「つながり」も大切なリソース

メンバーが持ち寄るものは、目にみえるスキルや道具だけではありません。子どもが幼稚園や学校に通うメンバーは、子どもたちやママ友パパ友のつながりを活かして、活動に参加するメンバーを広げています。

その他にも、メンバーがつながりをもつ地域の別組織やグループ(自治会、婦人会、子ども会、防災グループ、地域の企業など)との架け橋となり、地区の運動会に「多文化共生チーム」として参加するなど新たな協働や活動が生まれてきました。

また、ワールデンでは「外国人リポーター」と呼ばれるメンバーがいます。中国語やポルトガル語を使って、SNSで多言語情報を発信したり、活動時の通訳を担ったりします。外国人リポーターが外国人と日本人をつなぎ、また、コミュニティと地域をつないでいます。



リソースは地域から引き込む、継承する、共有する

- ワールデンでは、活動に必要なリソースがメンバーの中にある場合、それができる地域の人を活動に巻き込んでいくという流れも生まれてきています。
- 活動の中でそれぞれの特技を継承し、みんなで共有することで、一部のメンバーに負担が集中することを避けたり、活動を継続することができるようになります。



みんなが主役！主体的に参加する

始めたのは、
地域以外の人だったかもしれない。
でも、その後を決める話し合いは、
地域みんなが主役だった。

悪く言えば
「乗せられた」のかもしれない。
でも、乗りかかった船は、
みんなが船漕ぎを担っていた。

その主体性のポイントは、
立ち上げ当初から、そしてゼロから。

毎月のように開催した
実行委員会で一人ひとりが
対等に意見を出し合って、
ワールデンを作り上げてきたことです。





予定調和なしの参加型の実行委員会

ワールドデン活動のメンバーの情報共有と意思決定の場としての「実行委員会」は、概ね月1回、平日の夜18:30～21:00に行ってきました。その特徴は、①基本たたき台は用意しない、②対話を促す模造紙を使ったグループワーク、③ホワイトボードへの記録による結果の見える化です。

年齢、性別、国籍に関係なく一人ひとりが対等で尊重される場。何より、みんなが楽しそうで、真剣で、笑顔があふれる会なのです。「一言も話さず帰る」「話し合いの結果を理解せずに帰る」というありがちな会議とは無縁です。



みんなで話し合い、みんなで決めて、みんなで行う！

実行委員会では、右表および下記のとおり、ワールドデンに関わる殆どすべてのことをみんなで話し合い決定しました。「自分たちが十分に話し合い決めたことにはオーナーシップ(主体性)が生まれる」という説を体現するように、活動は進んでいきました。

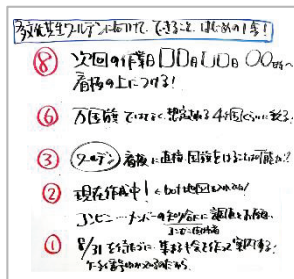
- ・ 「1 当初設計」…土地決定後のワールドデンのデザインや設備の検討
- ・ 「2 作業関連」…畑組・花壇組・広場組などチーム検討した作業の計画やふりかえり
- ・ 「3 催事関連」…収穫祭や田植え、合同作業後のプチ収穫祭などの企画やふりかえり
- ・ 「4 年間計画」…1年間のふりかえりと次年度の計画立案
- ・ 「5 共生実現」…ワールドデンや地域での多文化共生のビジョンや手立ての検討
- ・ 「6 体制予算」…ワールドデン活動の運営を行う体制や収支の検討



考え続ける「地域の多文化共生のために！」

ワールドデン活動がめざす「地域の多文化共生」は、一朝一夕には実現しない課題です。実行委員会でも、例えば下記のように何度も議題に挙げ、真摯に考え続けています。

- ・ 多文化共生のワールドデンを育てる私たちの心掛け
- ・ 多様な国籍の人が集まるワールドデンにするアイデア出し
- ・ 一ツ木地域の3年後の多文化共生のビジョン
- ・ ファミリーガーデン&外国人巻き込みチームによる検討
- ・ 多文化共生のまちづくりへとつながるワールドデンの旗印
- ・ 外国人住民との関わり方・つながり方の勉強会



ワールドデン実行委員会一覧

	1 当初設計	2 作業関連	3 催事関連	4 年間計画	5 共生実現	6 体制予算
2014.第1回	○				○	
第2回	○	○				
第3回	○	○			○	
第4回	○	○				○
第5回		○	○		○	
第6回		○	○		○	○
第7回		○	○		○	
第8回		○	○		○	○
第9回				○	○	○
第10回		○		○		○
2015.第1回		○		○	○	○
第2回		○	○			
第3回			○		○	
第4回		○	○		○	
臨時				○	○	○
第5回			○	○		○
第6回		○	○	○		○
第7回		○	○			
第8回		○	○			
第9回		○	○			
第10回			○		○	
第11回			○		○	○
第12回				○		○
2016.第1回			○	○		○
第2回					○	○
第3回			○			○
第4回			○		○	



会議運営も住民主体で

- 行政やNPOが担うことの多い会議の進行や記録作成を、住民が担うようにしていくことで、場所や時間の制約も減り、限られた時間で行う会議がより有意義なものになります。



4

とにかく楽しい！ひたすら楽しい！

“何だかんだいっても、
最後は楽しい！”

ワールデン活動をしていて、
メンバーの笑顔や
参加の様子から、
こんなメッセージを
受け取っています。

「楽しい！」と感じられることが、
多くの人の継続した
活動参加につながっています。





人が集まり、わいわいできる

ワールデンは、畑作業も会議の時も、いろいろな話や想いが飛びかい、わいわいしています。世代、性別、国籍などの異なる多様な人が、共通の想いを持って集う場は、なにより楽しいものになります。

それに畑では、一緒に作業をして汗をかいたり、季節の移り変わりや植物についていろいろな発見があったり、収穫物を調理してみんなで囲んだりと感動が満載！ また、ワールデンで知り合った子どもたちが、一瞬で打ち解けて笑顔で駆けまわり、野菜の収穫に目をキラキラさせて楽しんでいる姿を見ているのも、わたしたちおとなの楽しさであり、喜びです。



「わたし」を活かすことのできる場

畑も会議もみんなの手で作る「みんなが主役！」のワールデンでは、それぞれの想いや考え、そして特技を表現する場や機会があります。

参加型の会議では、だれでも自分のアイデアや想いを発言することができ、それを受け止める雰囲気があります。『ワールド・スマイル・ガーデン』の名前は、小学生からのアイデアでした。

自分の意見を受け止めてもらえることや、特技を思う存分発揮できること、そしてそれがワールデン活動をつくりあげていると感じられることが、この活動に関わることの楽しさのひとつになっています。



場もイベントも一緒につくる

ワールデンのイベントには、仕掛けがあります。参加者は受付を済ませると、まず畑作業やイベントの準備を一緒にしてもらいます。「働かざる者食うべからず」は冗談ですが、参加者一人ひとりにも役割があり、そのイベントを一緒になって作ってもらいます。

一緒に作業することを通して、みんなでつくりあげる楽しさや、“役に立っている”という喜びも感じられます。こうして参加者一人ひとりが、イベントやワールデンという地域の場をつくる一端を担うことで、ワールデンや地域への愛着も生まれてきます。



だれもが役割を持ち、 「わたし」を表現できる機会をつくる

- 主体的に関わる時、自分の力を発揮できる時、わたしたちは楽しさを感じます。
- より多様な参加者を増やしていくためにも、外国人住民にとっても、この楽しさを感じられるような企画をしていく必要があります。
- できあがったイベントに招待するだけでなく、外国人住民がより主体的に関わる機会や特技を発揮できる場面をつくっていくことが大切です。



5

「ゆるさ」って大事

地域における市民が
主体となる活動には
「結論ありき」も、
「完全な計画通り」も、
「こうあるべき」もありません。

その時の状況、その時の
メンバーの想いに
寄り添うことのできる

「ゆるさ」=柔軟さが、
関わる人たちの楽しさ、
そして主体的な参加へと
つながっています。





できる人ができることをする！ 疲れたら休む

ワールデン活動では、絶対に毎回の会議や活動に参加しなければいけないということもありません。参加の頻度や仕方は、参加者自身にゆだねられ、畑の作業やイベントの準備・実施なども、できる人ができることを考えて行います。参加することを強制されないで、メンバーも安心して活動に加わっています。

また、月に1度の合同作業やイベントなども、事前に申込みの必要はありません。参加者がどのくらい集まるのか当日までハラハラする部分はありますが、参加者にとっては気軽に参加できる場となっています。

また、通りすがりの人へも声をかけて、立ち寄りてもらったりすることもしばしば。「誰でもウェルカム！」で、気軽に安心して立ち寄りることのできる場づくりをしています。



気づいた人・できる人が、まずやってみる

ワールデン活動は、活動運営の大切な部分はみんなできちんと議論し、それ以外はメンバーそれぞれの自己裁量に任せる、という「ゆるさ」を持たせた活動になっています。

会議で決めたことだけを実行するのではなく、メンバーそれぞれが「よりよいワールデンにするためにやるといい」と考えたこと・気づいたことを実行してきました。

畑の草刈りや花の種まきといった作業から、外国人研修生を多く抱える地域の企業やご近所の外国人住民へ活動参加のお誘いに行くという広報活動も、気づいた人・できる人がまず自主的にやってみます。そして、それを会議の際に共有して、実行委員会全体で行った方がいいということになれば、以後の活動に反映させていきます。



「ゆるさ」=「なんでもあり」ではない

事務局も当初の計画・想定通りではない展開の中でも、市民メンバーに寄り添い、地域のことを考えて対応する「ゆるさ」(=柔軟さ)を発揮できたことで、多くの人が継続して関わる広がりを持った活動になってきました。

この「ゆるさ」の裏には、事務局内部や、市民と行政の間はもちろん、メンバー一人ひとりの間に信頼関係があり、また、密なコミュニケーションが取られていることがあります。

そして、「ゆるさ」は「なんでもあり」とは違います。プロジェクトがめざすところは明確に持ちながら、それを実現するためのプロセスに幅をもたせること、それが「ゆるさ」です。



「ゆるい」からこそ、ビジョンやプロジェクトの進行具合をみんなで確認・共有することがより大切

- 活動に「ゆるさ」を持たせ、一人ひとりの自主性や自己裁量に任せる部分が増えるからこそ、プロジェクトのめざしているビジョンや進捗状況をみんなで確認・共有することが大切になります。
- ワールデンプロジェクトでは、道具の使い方など基本的な「活動ルール」は作成しましたが、多文化共生の地域づくりのための活動は「3つの旗印」として柔軟に取り組めるよう設定しています。(⇒P. 39)
- 実行委員会では、定期的にこれらをふりかえり、成果や活動計画を検討しています。



6 農作業は地域づくりに向いている！

わたしたちが選んだツールは、
たまたま農作業・コミュニティ
ガーデンづくりでした。

多文化共生を前面に
打ち出すのではなく、

「みんなで農作業を
楽しんでいたら、
それが多文化共生の
地域づくりに
つながっていた！」

を目指しました。

多文化共生の地域づくりには、
もっといろいろな方法や場が
あればいいとおもっています。





おしゃべりしやすい環境と機会

そもそも屋外での活動は解放感がある上、会議室で机を挟んで向き合って交流するのは違い、横並びで野菜や花の手入れをしながらの会話は、よりリラックスして他者と向き合うことができます。作業も草取りや種まきなどの単純作業がほとんどで、会話を楽しむ余裕もあります。

それに加え、天気や野菜の様子、野菜の調理方法や虫の名前... 肩肘張らずに共有できる会話のネタは目の前にたくさん溢れています。ワールデンでは、そんな何気ない会話から、互いの文化や習慣を知り理解することにつながり、さらに暮らす地域のこと、日々の生活での困りごとへと話題が展開していきました。



若者や子どもたちにとって新鮮な体験

土に触れたり、時間をかけて、定期的に世話をしないといけない植物の栽培は、都市部で暮らす若い世代や子どもたちにとっては新鮮な体験となり、継続した活動参加につながりました。

また、「農作業を通して、植物や自然に触れる機会を楽しみたい」「子どもたちに体験してほしい」と考えている若い世代がいること、そしてそれは日本人だけではないということを活動の中で知ることができました。



共通の楽しみがたくさん生まれる

農作業には、「一緒に楽しめる」ことがたくさんあります。その一部を紹介します。

● 育てる！

一緒に作業をすること、また作業をしながらの会話を楽しむことができます。それぞれの国での野菜の名前や調理方法の話題から、収穫できたら各国の料理を作ってみようという話も弾みました。



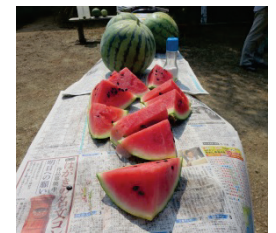
● 収穫する！

時間をかけて育てたものが、収穫物として手に入り、それをみんなで分けあったり、調理して楽しむことができます。収穫祭では、取れた野菜で、ブラジル料理やフィリピン料理にも挑戦しました。



● 食べる！

最後には一緒に食べることができる。食べ物があると会話も弾み、参加者同士の距離もぐっと縮まります。「食べる」という共通の楽しみがあるということが、継続した参加にもつながっています。



地域の特性や状況にあった方法を選ぶ

- ワールデンでは、参加者が多文化共生を必要以上に意識せず、共通の楽しみがたくさん生まれるコミュニティガーデンづくりを行っています。どの地域でもコミュニティガーデンが作れるわけではありません。
- 地域の特性や状況に適った方法や場を見出すことが大切です。まずは、地域に「あるもの」をふりかえてみましょう。



7

非日常じゃなく「日常」

ここ数年
わたしたち日本人は

「日々の暮らし」
「あたりまえの生活」が
どれだけ大切で
しあわせなことなのか、
学んできた気がします。

日本人だけでなく
外国人住民も
未来を担う子どもたちも

そんな
「あたりまえの生活」ができる
地域を創りたいのです。



イベントはきっかけづくり

ワールドデンでは、年に何回か楽しいイベントを行います。そうしたイベントにはたくさんの方が集まってくれます。

でも、これまでの活動をふりかえって手ごたえや成果を感じるとしたら、それは月1回続けてきた実行委員会や合同作業の中から生まれてきたものです。意見交換や作業の積み重ねで、少しずつ少しずつ、「ワールドデン」が形になっているのです。

決して、イベントがダメなわけではありません。気軽に楽しく参加できるイベントは、参加の敷居を低くしますし、メンバーにとっても「目標」「メリハリ」「モチベーション」になります。イベントをきっかけにワールドデンに参加してくれたメンバーもいます。

大切なのは、イベントを単発で終わらせずに、次につなげることでしょう。



「多文化共生」とは「安心できる日常」を創ること

そもそも「多文化共生」とは、いろいろな考え方、いろいろな文化、いろいろな背景をもつ人々が、お互いに理解し合い、共に安心して暮らしていくこと。それは外国人との間だけで考えることではなく、日本人同士でも、もしかしたら、家族の間でも考えなければいけないことです。「日常」のちょっとしたことに対して違和感や不満や疎外感を感じた時、私たちは「暮らしにくい」と感じてしまいます。

ワールドデンでは、「多文化共生」を特別なことと捉えるのではなく、「安心して暮らせる地域づくり」の要素と捉えています。外国人にとって暮らしやすい地域は、日本人にとっても暮らしやすい地域なのです。



日常の積み重ねで育まれる信頼関係

ワールドデンのプロジェクトを立ち上げたとき、わからないながらも多くの住民が参加してくれた理由の一つは、事務局に刈谷市が関わっていたこと、刈谷市の担当者と住民の間に「刈谷市が関わっているなら安心」という信頼関係ができていたことです。

また、『ワールド・スマイル・ガーデンツツ木』(→P. 41)には、ブラジル人メンバーがいます。プロジェクトが始まる前は、街で見かけても話しかけたことがなかったという日本人メンバーたちが、今では、出会えばもちろん挨拶もしますし、何かあると「ブラジル人から見たらどう思うか、彼に聞いてみようよ」と仲間として厚い信頼を寄せています。

こうした信頼関係は、1回のイベントや特別に用意された場で築けるものではありません。時間をかけた日常の積み重ねで育まれるものです。そして、こうした信頼関係がなければ、地域づくりに取り組むことはできませんし、本当の意味で「多文化共生」の社会を創ることなどできないのではないのでしょうか。



イベントで終わりではなく、イベントもプロセス！

- きっかけはイベントでもOK。そこに参加した人がいかに継続的に活動できるか、日常的に関われるか、そのプロセスもあわせて企画しましょう。



成果は「じゅわじゅわ」あらわれる

土地が見つかったとき
みんなで決めたことができました。

「最低5年は
このプロジェクトを続けようね。」

地域づくりは
時間がかかるものです。

いろいろな人が協働するということは
時間がかかるものです。

あせらず、あわてず
じっくり、ゆっくり
1歩1歩を大切にしています。





「多文化共生」は一朝一夕に実現できない

1990年以降日本に住む外国人の数が急増し、「多文化共生」ということばが頻繁に使われるようになりました。でも、「多文化共生」は、外国人との交流だけを指すわけではありません。

国籍に関わらず、いろいろな考え方、いろいろな想い、いろいろな価値観、いろいろな背景を持つ人々みんなが暮らしやすい地域を創ることです。そのためには、次のことなどが大切です。

- 自分自身の生活をふりかえる
- 地域のことを知る
- どんな地域を創りたいのか考える
- それを共有する
- 実現のために行動する



だから、「多文化共生」はすぐにできるものではありません。じっくり取り組まなければ実現しないのです。



リソース×想い×時間＝ワールドデン

ワールドデンでは、だれか1人の発言で物事が決まることはありません。フラットな関係で、だれが何を言っても大丈夫！

考え、知識、スキル、経験や想いを共有し、とことん話し合い、形にしていくのです。いろいろなリソースを1つの形に創りあげていくためには、試行錯誤もあり、回り道もあり、1歩進んで2歩下がるなんてこともあり。でも、そのプロセスこそが「多文化共生」。

そのプロセスを組み立ててくれたのがNIED・国際理解教育センター。メンバーの想いをうまく引き出し、記録をまとめることで、目に見える形で残していきます。

そうやって、時間をかけて積み上げたからこそ、納得のいく自慢のワールドデンができあがりつつあるのです。

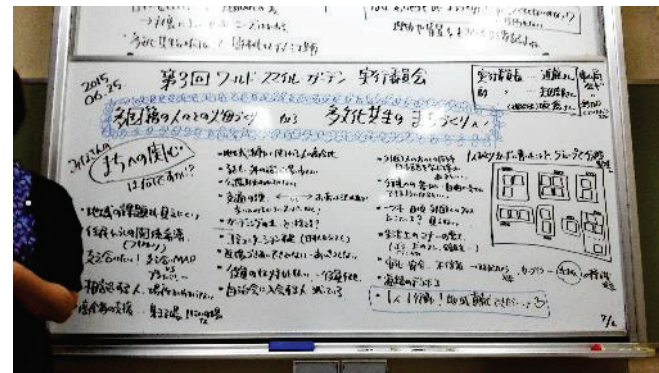


時間をかけて実感する成果

3年目を迎えるワールドデン。今みんなで取り組んでいるのは、もっともっと多くの外国人住民に参加してもらうためにはどうすればいいか？立ち上げ当初は「はあ？多文化共生って何？」「刈谷って外国人住民、多いの？どこに住んでるの？」と言っていたメンバーから、次から次へとアイデアが出てきます。

今でも「多文化共生」なんてことばをふりかざそうものなら、「そんなこと言ってる暇あったら、草抜いて～」なんて言われそうですが、『ワールド・スマイル・ガーデンツ木』は、確実に多文化共生の意識をもった方たちの集まりになっています。

わたしたちはとかく、「きょうのイベントは何人集まった」「外国人は何人来た」という数字だけで成果を捉えがちですが、それと同じくらい大切なのが質的な変化。なかなか目には見えませんが、じっくり時間をかけることによって得られる成果です。



成果をすぐに求めずに、プロセスを楽しもう！

- 地域づくりをするならば、あわてず、じっくり取り組むことがミソ。
- 年度ごとに事業を組み立てなければいけない行政の弱みをおぎなってくれるのが、NPOやボランティアです。両者の強みを活かして、「時間をかけることができる」仕組みを考えましょう。



多様性は豊かさ 多様性は強さ

「地域は多様な人々によって
支えられている」ということを
活動を続ける中で
確認しました。

「多様さ」は
見つけることでも、
集めることでもない。
もともと地域は多様なものです。

いろいろな背景や特技を
持った人たちが、互いに
活かしあいながら、
それぞれの違い・多様さを楽しみ、
認め合うことができると
もっと豊かで、
強い地域づくりに
つながると思います。





違いを強みにする

ワールドデンには、いろいろな年代、いろいろな国籍や文化背景を持った人が集まっています。子どもとおとな、子育て世代からシルバー世代、ずっとこの地域で暮らしてきた人や新しく越してきた人、その中には日本人もいれば、外国にルーツを持つ人もいます。

一人ひとりがそれぞれの経験や価値観、習慣・文化の多様さを持っているので、ワールドデンをより良くするために出てくるアイデアも様々です。畑作業の方法、イベントの内容、広報の方法など、それぞれいろいろな方法を考えることができます。

多様なアイデアを持ち寄る一人ひとりに違いがあることがワールドデンの強みになっています。



違いから学ぶ

誰もが安心して集うことのできる場をめざすワールドデンでは、できるかぎり無農薬での畑づくりに挑戦しています。

しかし、日々の作業の中心を担うメンバーが、ある会議の最後に「みんなに謝りたいことがある」と切り出し、畑の隅に除草剤を使用したことを告白しました。夏場は月一回の合同作業の草取りだけでは間に合わないうえ、できるだけきれいで立派な野菜が収穫できた方がメンバーのモチベーションにもつながると思うということが理由でした。背景には、野菜作りについての知識や経験、農薬について知っている情報等の差や、畑作業への関わり方(日々の作業量)などの違いがありました。

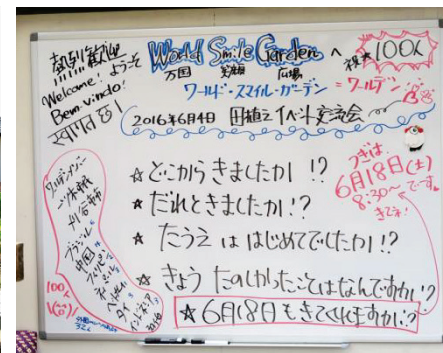
この出来事は、ワールドデンについてのメンバーの多様な意見や想いに触れる機会になったほか、無農薬栽培の方法を調べたり、夏場の作業日の回数の見直しにつながりました。一人ひとり考え方も、知識の量も、関わり方も違うから、一緒に活動することでいろいろな発見があります。また、知らないことを教え合い、学び合うこともできます。



多様さが魅力になる

ワールドデンには、1つのガーデンの中に畑・花壇・広場・田んぼと多様なフィールドがあります。1つの場でいろいろなことができると、それだけ関わる人々の特技を發揮できる場が増え、より多様な人の関心にそうすることができます。

自分の想いをかたちにでき、関心ごとを追求できることが魅力となり、より多様な人々が集う場になっていきます。



「言葉」「文化」「心」 3つの壁を越える手立てを見つける

- 多様な人が集う場には、「言葉の壁」、「文化の壁」、「心の壁」が存在します。
- ワールドデンでは、ブラジル出身のメンバーや外国人リポーターが言葉や文化の壁を越えるサポートをしています。
- 心の壁は、関わることで越えることができます。活動を始めたころは「こわい」と感じていたブラジル出身のメンバーとも、今では道で会えばあいさつをしあう関係になりました。
- また、バルーンアートなど、自分の特技を活かして交流するメンバーもいます。一人ひとりが、これらの壁を越えていくための手立てを持つことが大切です。



10 信じれば叶う！あきらめたらおしまい

協働相手も、土地も、
ノウハウも何もなく、
ただただ担当者の
想いから始まった
ワールデンプロジェクト。

事務局にとっても、
市民にとっても、
これまでに経験のないことばかり。

できない理由は
簡単に見つかります。

でも、想いをもって
始めたプロジェクト。
信じて続ければ
かならず実現する！

そんな想いで活動を続けています。





まずは想いやアイデアを口に出すことから

想いやアイデアを口にして、共有しましょう。そして実現できる道を探してみる。実現するためのリソースを持っている人へ協力をお願いしてみることも大切です。

すぐに実現することもあれば、なかなか思うように進まないこともあります。でも、確かなことは、動いてみないと実現には近づかないということ。

はじめは無理そうに感じたことでも、ワールデンで実現してきたことはたくさん！右に挙げているのはほんの一部です。



「できない理由」ではなく「できる道」を探す

現在のワールデンになるまでに、いくつかの法律や制度の制約もクリアしなくてははいけません。制度に反しない方法を模索する中では、刈谷市が制度の詳細を調べたり、役所内部で関連部署との相談や調整を行ってくれた結果、マイタケハウスの設置やお借りしている土地の固定資産税の減免も実現しました。

活動を継続していく資金についても、いつまでも予算が確保できるわけではありません。まずは事務費を除いた活動経費をメンバーみんなで確認し、内容を精査することから始めました。時間をかけて検討を重ねた結果、市民メンバーによる任意団体を立ち上げることになりました。任意団体となることで、各種助成金の申請を試みたり、地域から寄付を募ることも可能になりました。

少し無茶にも思えるアイデアや想いに対しても、実現可能な方法の提案ができたのは、「制度的に難しい」「お金がないからできない」ではなく、「お金はないけれどやれることをやろう！」「実現可能な道を探ろう！」という姿勢があったから。

それぞれの実現したい想いと、それを阻む制度や状況などを隠さず正直に話し合うことで、みんなで「できる方法を探す」雰囲気をつくってることができました。

＜想いから実現した自慢のアイデア例＞

- 開園する土地が見つかった！
- 初めての収穫祭で、外国につながるのある5カ国の参加者を含む100名以上が集まった！
- マイタケハウスや雨水利用など、設備の充実！
- 地区運動会へ「多文化共生チーム」として参加！
- 花壇のシンボルツリーを飾って、クリスマス会の開催！
- ピザ釜を使ってピザパーティー！



やめない！あきらめない！ひとりで背負い込まない！

試行錯誤を繰り返し、停滞や遠回りをして、ポジティブに実現可能性を探り、一つひとつ想いを実現しながら、多文化共生の地域づくりを進めているのがワールデンプロジェクトです。

「新しいこと」は、そう簡単に思うようには進まないものです。また、立ち上げることよりも、継続していくこと、地域住民や次世代へ引き継いでいくことは、エネルギーも時間もかかります。

それでも、同じ想いを持ち、時には「疲れちゃった」と弱音をはける仲間がいれば、きっと実現できるのです。



多文化共生の地域づくりの醍醐味を味わう

- 「できるか、できないか」より「何がしたいか」「どんな地域を創りたいか」を大切にしましょう。
- 「地域を創る」「地域を変える」ことは簡単ではありません。想いを同じにする信頼できる仲間と楽しみながら、困難と思えることにもチャレンジする。それでこそ、「愛着と誇りのもてる地域」になるのです。

広場組の力作

▼ 実行委員の中でDIYが得意なメンバーが集まった「ワールデン広場組」による工作物の数々です。



▲マイタケハウス、各種ベンチ(白色)



▲各種テーブル



▲雨水タンク、水場



▲掲示板、階段



▲看板/据え付けベンチ



▲倉庫/肥料置き場



▲レイズドベッド、階段からマイタケハウスまでの導線



▲堆肥づくり場



▲パーゴラ



▲ロケットストーブ



▲巣箱/銘板



▲花壇